

第一一部

編さん沿革

鹿児島市は、島津氏七百年の歴史的伝統に輝く史都として、また、世界でも珍らしく市内に活火山桜島を有する絶景の都市として有名である。また、さんさんと降り注ぐ太陽と、目にしみる緑の城山及び街路樹は、南国鹿児島を象徴して、訪れる観光客の数は、近年とみに多くなっている。しかし、この鹿児島市は、文久三年の薩英戦争、明治十年の西南戦役に次いで、今次の第二次世界大戦と、三度の兵燹にあり、その焦土の中からたゆまない努力によって、九州の政治・経済・文化の中心都市に発展してきた。

その間、市当局においても、市議会においても、市の発展の歴史を後世に遺すべきことが痛感されていた。たまたま、昭和三十九年三月二十八日に開催された市議会において、議会側から「鹿児島市史」発刊の要望がなされたのである。

そもそも、「鹿児島市史」は、大正五年と大正十三年の二回刊行されている。そのほか、昭和十年に「鹿児島地誌」昭和三十五年に「鹿児島のおいたち」が発刊されている。それ

編さん沿革

らと前後して、昭和十三年六月二十一日、同十六年四月二十四日、同二十一年一月二十六日の三回、市史編さん委員
または市史編さん事務の嘱託辞令が発令され、発刊の計画がなされたことも再三であった。昭和三十九年七月、谷川眷治に市史編さん担当参事の辞令が発令されて編さん事業の第一歩が踏み出されたのである。谷川は直に資料の収集にとりかかり、想をねること一年有余、その間に、鹿児島市史編さん委員会が組織され、左記の人々が委嘱された。

鹿児島大学法文学部

桃園 恵真

〃

五味 克夫

〃 教育学部

北川 鉄三

(現鹿児島大学名誉教授・鹿児島女子短期大学教授)

鹿児島大学教育学部

四本 健光

鹿児島県立短期大学学長

佐伯延次郎

南日本新聞社常務取締役

川越 政則

(現株式会社鹿児島テレビ常務取締役)

名誉市民・元市長

勝目 清

鹿児島商工会議所事務局長

三木原勝義

鹿児島県立図書館長

久保田彦穂

(現鹿児島女子短期大学教授)

鹿児島市市議會議員

浜平 勇吉

助役

内倉 良文

中尾 武夫

(昭和四十二年四月二十八日辭職)

加世田不二男

赤木 三郎

橋口 肇

(以上三名、自昭和四十年八月二十八日、至昭和四十二年八月二十三日)

永野 武義

收入役 山下 速夫

上入来幸吉

(自昭和四十年六月十六日、現在に至る)

(以上二名、自昭和四十二年八月二十四日、至昭和四十二年五月二十七日)

公室長 石田 信隆

新名 真弥

(自昭和四十年六月十六日、至昭和四十二年八月二十四日)

(自昭和四十三年五月二十七日、至昭和四十四年五月二十七日)

野村 宗夫

中原 時秀

(自昭和四十二年八月二十四日、昭和四十三年七月五日

(自昭和四十三年五月二十七日現在に至る)

事務分掌に関する規則昭和四十三年規則第四十号により

坪内 時義

行政部長、至昭和四十三年七月十五日)

多田 儀一

(自昭和四十四年五月二十八日、現在に至る)

行政部長

三ツ井卯三男

一日) 迫田 盛昌

(昭和四十二年四月二十八日辭職)

末吉 利雄

末吉 利雄

(自昭和四十四年九月一日、現在に至る)

武 政治

(自昭和四十二年五月二十一日、現在に至る)

教育長

(現鹿兒島経済大学)

〃 教育委員会指導課長 芳 即正

(現鹿兒島女子高等学校長)

かくて第一回の鹿兒島市史編さん委員会は、昭和四十年八月二十七日(金)午前十時から消防会館で開催された。この時の出席者は、勝目・佐伯・北川・川越・三木原・四本・浜平・赤木・内倉・山下・武・石田・芳の各委員及び谷川の十四名であった。この日、委員の中から、会長に勝目清、副会長に北川鉄三の両氏を選出した。更に鹿兒島市史編さん委員会規約を次のとおり定めた。

鹿兒島市史編さん委員会規約

(設置)

第一条 鹿兒島市史編さん(以下「市史編さん」という。)のため、鹿兒島市史編さん委員会(以下「委員会」という。)を置く。

(目的及び事業)

第二条 委員会は、市史編さん事業を円滑に推進するためつぎの事業を行なう。

編さん沿革

(1) 市史編さん事業の企画と推進

(2) 執筆者及び監修者の選出

(3) その他市史編さんに必要な事業

(組織)

第三条 委員会の委員は市長が任命、又は委嘱する。

(会長、副会長)

第四条 委員会には会長及び副会長を置く。会長、副会長は委員の中から互選する。

(会長の職務)

第五条 会長は委員会を代表し、会務を統理する。

2 会長が事故あるときは、副会長がその職務を代理する。

3 会長、副会長ともに事故あるときは、あらかじめ会長の指名する委員がその職務を代理する。

(招集)

第六条 委員会は会長が必要に応じて招集する。

(書記)

第七条 委員会には書記若干名を置く。

2 書記は市の職員の中から市長が任命する。

3 書記は会長の指揮を受け、委員会の事務を処理する。
(規約の委任)

第八條 委員会の運営に關し、必要な事項は委員会で定める。

付 則

この規約は、昭和四十年七月二十三日から施行する。

このようにして市史編さん事業の推進母体である委員会が、正式に発足したのである。そこで当局側から、その日までに作成した市史編さん要項が提出され、委員会において審議した結果、更に小委員会を組織して検討することに決定した。同年九月六日（月）十三時、人事課研修室において、勝目・北川・五味・川越・三木原・赤木・石田・芳の各委員及び谷川の九名が集合して、鹿児島市史編さん基本方針を定めた。同月十日（金）十四時には、市議会図書室に、北川・五味・石田・芳の各委員が参集し、これに谷川が参加して、編さん目次を作成した。

昭和四十年九月二十五日（土）十三時三十分、人事課研修室における委員会は、勝目・佐伯・北川・川越・五味・三木原・浜平・中尾・赤木・三ツ井・内倉・山下・石田・芳の各委員が出席し、これに谷川が参加して開かれた。委員会では、小委員会で作成した鹿児島市史基本方針及び編さん内容を検討した結果、編さん内容については、多少の

修正が加えられ、次のとおり決定した。

鹿児島市史編さん基本方針

- (1) 市制施行八十周年記念事業として、鹿児島市史編さんを行なう。（昭和四十四年四月一日）
 - (2) 本市史は古代から明治二十二年市制施行までの歴史の変遷とともに、市制施行以後現在に至るまでの市勢の進展の経過を明らかにする。特に市制施行後に重点を置く。
 - (3) 鹿児島市の行政の変遷を骨子とするとともに、その他の市の歴史を以て肉付けする。
 - (4) 資料編を追加作成する。
- 古文書・記録・金石文・旧戸籍・地籍・地図等について平行して資料調査を行ない、その中の重要なものを採録する。

市制施行以前の鹿児島Ⅰ（六〇〇頁）

序 説

第一編 鹿児島市概観

第二編 明治維新前の鹿児島

第三編 明治前期の鹿児島

市制施行以後の鹿児島Ⅱ（二〇〇〇頁）

序説

第一編 政治

第一章 行政、財政

第二章 議会

第三章 選挙

第四章 保安

第五章 市域の発展

第二編 経済

第一章 商工鉱業

第二章 農林、水産業

第三章 観光

第四章 交易

第五章 金融

第六章 交通、通信

第三編 社会

第一章 社会福祉

第二章 保健衛生

第三章 労働

第四章 社会事業

編さん沿革

第五章 災害

第六章 戦災

第七章 市民生活

第四編 教育

第一章 学校教育

第二章 社会教育

第三章 体育

第五編 文化

第一章 文化

第二章 文化財

第三章 新聞、放送

第四章 宗教

資料編Ⅲ（六〇〇頁）

遺跡

遺物

古文書

記録

金石文

日記

戸籍

地籍図

年表

地図

索引

編さん沿革

編集後記

市史編さんの基本方針と、編さん内容が決定すると、同年十月二十七日、議員応接室で開かれた小委員会で、次のとおり執筆担当責任者として交渉することにした。

第一巻は鹿児島大学法文学部教授五味克夫・鹿児島市教育委員会指導課長芳即正（現鹿児島女子高等学校長）・鹿児島大学教育学部教授四本健光の三氏、第二巻は、鹿児島大学法文学部教授岩元和秋及び鹿児島大学教育学部教授北川鉄三（現鹿児島大学名誉教授、鹿児島女子短大教授）・鹿児島大学法文学部教授桃園恵真の三氏、第三巻は鹿児島大学法文学部教授五味克夫氏他にそれぞれ委嘱した。

これと同時に、監修者には委員の勝目清・北川鉄三の両

氏の快諾を得た。その後、執筆者の諸先生方の了承も得られたので、各委員にこの旨通知すると共に了解を得た。

年が明けて昭和四十一年に入ると、執筆者会議を開いて執筆についての注意事項や横の連絡を緊密にとるなどして事業は具体的に展開してきた。編さん室では、庁内各課に文書記録・刊行物・統計・地図等の資料の提供を求め、また市民に対しては、保存所蔵されている各種資料の貸与方を新聞・市公報紙・テレビ・市政だより欄を通じて、その協力を求めた。かくして、町田文書・東郷文書・薬丸文書・川上文書・加世田文書及び松原神社の文書等が集まり、編さん室では、五味克夫委員とともに、日曜日でもこれら資料の写真撮影、整理に、暑い夏の日も、寒い冬の日も忙殺される有様であった。また、第二巻の現代編のために、各種統計表を作成して、各執筆者に配布する等猫の手も借りたい程の忙しい日が続いた。その間、編さん室は、しばしば居を移転するの余儀無い事情もあったが、昭和四十二年九月からは、新館四階の研修室に同居して現在に至っている。

明けて四十三年の春頃から、第一巻（歴史編）の原稿が集まって来た。内容は古代から市制施行以前までであった。

執筆者は次のとおりである。

第一編 自然環境は服部信彦（鹿児島大学法文学部）、第二編原始古代編第一章原始は河口貞徳（鹿児島県文化財専門委員）、第二章古代の鹿児島は郡山良光（鹿児島経済大学）、第三編第一章鎌倉時代の鹿児島は五味克夫、第二章南北朝期の鹿児島は山口隼正（東京大学史料編纂所）第三章室町時代の鹿児島は郡山良光、第四章戦国織豊期の鹿児島は虎頭民雄（鹿児島県立短大）、第三編近世編第一章城下の変遷は芳即正、一部を松下志郎（福岡大学）、第二章農村の生活は向山勝貞（明治百年記念館建設事務局）第三章文化の発展は宮下満郎（鹿児島県立鶴丸高校）、第四章宗教のうごきは桃園恵真、第五章民族と行事は村田照（鹿児島県立工業高校）第五編明治前期の鹿児島は四本健光の各氏であった。

以上の原稿は監修に移された。五・六・七・八月と暑い夏の頃にさしかかった。勝目清・北川鉄三の両氏は矍鑠として酷暑もいとわず、編さん室に日参されて熱心に監修された。監修・整理を終えた原稿は、全年九月九日研修室において開催された市史編さん委員会に提出された。出席者は、勝目・北川・佐伯・川越・久保田・五味・永野・

上入来・末吉・山下・多田の各委員と谷川であった。まず谷川の経過報告及び原稿内容の説明が行われて検討された。

ここで原稿は委員会を通過し、市役所用度課にまわされ、市内の印刷業者六社によって印刷製本の指名競争入札が行われ、市内東千石町文進社印刷株式会社に落札した。

当局としては、さきに鹿児島市史編さんの報が伝わるや多数の購入希望者があったので、これを広く公募するため新聞・ラジオ（MBC）・市公報紙を通じて連絡するとともに、その内容の紹介文書を広く各方面に配布した。申込みは予定をはるかに越え、遠くアメリカ、ハワイの各大学からの申込みもあって、遂に増刷せざるを得なくなった。

昭和四十四年二月、遂に待望の第一巻（歴史編）が納入された。頁数は予定の六〇〇頁を越えて七八四頁になったことは、執筆者及び編さん者の熱意によるもので、また購入希望者の増加は関係者の一驚するところであった。

編さん室では、第一巻（歴史編）が刊行されるや、直ちに第二巻の編さんに着手した。これは市制施行後から隣接の谷山市を新設合併し、新しく鹿児島市が誕生した前後までの八〇年の歴史であった。現代史の難しさは想像以上のもので、執筆・監修の段階で一字一句にも血のじむよう

な労苦が払われた。今日まで不明であったところが判明し、そのために明瞭な記録として残されるようになった点は、非常に大きな収穫であった。また写真も、明治末期から大正・昭和の初期にかけて多数発見されて、錦上花を添えた感があった。このように慎重を重ねた第二巻は、予定の二〇〇〇頁を越えて一一四〇頁に膨張した。

執筆者は次のとおりである。

第一編政治第一章行政は石神兼文(鹿児島大学法文学部)、第二章財政と第四章保安は岩元和秋(鹿児島大学法文学部)、第三章議会・選挙は平田好成(鹿児島大学法文学部)、第二編経済第一章商工業、第五章金融、第六章交通通信は谷川眷治、第二章農林水産業は上村剛一(鹿児島大学法文学部)、第三章観光は仲村政文(鹿児島大学法文学部)、第四章交易は岩熊三郎(鹿児島大学法文学部)、第三編社会第一章社会福祉は北川鉄三、第二章保健衛生は北川鉄三、岡部市之助(鹿児島大学教育学部)、第三章労働は岡部市之助、第四章公共事業は佐多一貢(鹿児島大学附属中学)、第五章災害・戦災は谷川眷治、第六章市民生活は岩元和秋・谷川眷治、第四編教育は北川鉄三、第五編文化、第一章文化、第二章文化財は村田熙、第三章新聞、放

送第四章宗教は桃園恵真の各氏であった。

印刷は第一巻と全じ文進社印刷株式会社に落札され、この年の暮十二月から初められたが、翌年全国を襲った流行性感冒のため、印刷会社においても多数の従業員が倒れる等難作業が続ぎ、編さん室においても校正に正月の休みも日曜も返上する有様であった。このように絶ゆまない努力が続けられたこの年の二月末日に、谷川は市史編さん担当参事の職を退いた。然し、編さん事業は依然として囑託として引続いて進められることになった。三月に入ると至難と思われた印刷・校正を見事に克服して納品され、鶴首して待つておられる大方の購読申込者にいち早く発送することが出来た。第一巻同様、第二巻もそれに劣らぬ好評であった。第二巻の発送を終えると、既に第三巻の編さんが待つていた。第三巻は資料編で、原稿は主として五味克夫委員が企画収集した。その結果、集まった資料も多量であったために、取捨選択にあたっては、未刊史料を優先して編集を行なったが、それでも予定枚数の一〇〇〇枚を超過する有様であった。それだけに編さん室は多忙を極めたが、勝目清・北川鉄三両氏の監修を終り、八月二十八日十三時三〇分、研修室において委員会を開き、勝目・北川・佐伯・五味

・四本・芳・中原・末吉・橋口・迫田の各委員のほか、谷川が出席して、第三卷（資料編）の各項目について種々検討した後、異議なく決定した。ここにおいて九月十七日用度課では最後の三度目の指名競争入札が行われ、文進社印刷株式会社が落札し、全巻を通じて全社が印刷を担当することになった。

第三卷の各節の執筆者は次の通りである。

第一部鹿児島県地誌、同備考抄は築地健吉（鹿児島県文化財専門委員）と五味克夫、第二部古代関係資料は郡山良光、第三部中世関係史料は山口隼正と五味克夫、第四部近世関係史料は五味克夫、第五部近代関係史料の中、上村行徴日記は五味克夫、上村慶吉履歴・かごしま案内・町会記録・第四百七十七銀行及び和田正苗辞令は谷川眷治、錦江新誌号外・鶴嶺雑誌・三州義塾文学規則は四本健光、写真資料は四本健光・谷川眷治、第六部鹿児島島の古文書は主として、五味克夫と一部を桃園恵真が、第七部鹿児島島の金石文は築地健吉・河野治雄（鹿児島県立指宿高校）・黒田清光（鹿児島市史談会員）、第八部鹿児島市関係文献目録は古賀秋好（鹿児島県立図書館）、の各氏第九部年表・第一〇部索引・第一一部編さん沿革は谷川眷治がそれぞれ担当した。

編さん沿革

このほか、写真については、服部信彦・五味克夫・西元肇（紫原中学）・谷川眷治のほか、市観光課・市広報係・東京大学史料編纂所・県立図書館・尚古集成館、その他からのご提供を頂いた。

終りに一々芳名を列挙しなかったが、各巻を通じて史料の調査・提供並びに原稿作成等に際して心よく御協力いただいた所蔵者並びにその他の各位に深甚なる謝意を表しておきたい。

なお、この郷土のあゆみを後世に伝えることの出来たことは、編さん委員、執筆者及び当局や市民の方々の温いご鞭撻によるものと、ここに厚くお礼申し上げます。

昭和四十六年二月

市史編さん担当囑託

谷川眷治

鹿児島市史Ⅲ

昭和四十六年二月二十日印刷

昭和四十六年二月二十八日発行

編纂者 鹿児島市史編纂委員会

会長 勝 目 清

発行者 鹿児島市長

末 吉 利 雄

印刷者 鹿児島市東千石町一九の九

文進社印刷株式会社

電話 0792・5814

らん心の事

丸目流し

あ

なま

光
平
の
年
一

子
之
美
人
也

子
之
美
人
也

一

子
之
美
人
也

忠
恒

